

志天双の能

[ひてんふたわのう]

—— 第二回 ——

令和6年2月8日(木)

午前10時始

伊勢神宮参集殿能舞台

表現者たちの

向き合っていること

司会 もう来月ですが「飛天双〇能」が始まります。これは能楽奉納を行うという事なのですが、本日は表現者のみなさんにお集まりいただき、奉納って何なんだろうかと、皆さんのお考えを対談のようにご自由なスタイルにてお話ししていただきたいと思っております。全員初めてお会いする方々ですので、各々の自己紹介の後に開始させていただきます。宜しく願います。

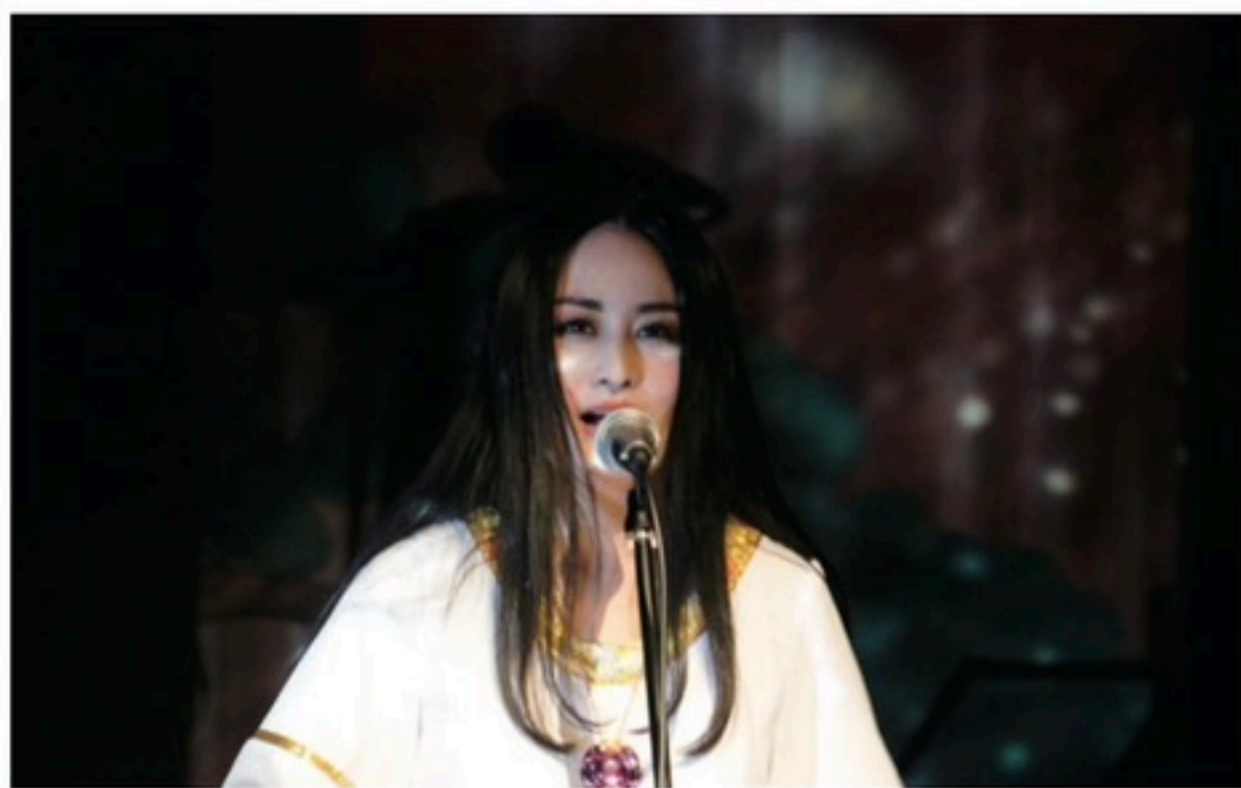
中嶋晃子（シンガーソングライター、以下中嶋） よろしく願います。まず昨年の12月8日のジョンレノンの命日の日に、私が、福岡の住吉神社能楽殿という場所で「水鏡」のイベントを主催したときに大倉正之助さんにオフアをして来ていただきました。私と今ここにいらっしゃる豊川容子さんとピアニストの福田基さんとギタリストのペペ伊藤さんと、そして大倉正之助さんと私とで舞台を開催したんです。

そのときに最後にみんなでイマジン日本語と英語とアイヌ語で歌う表現をしたんです。そこで能舞台を選んだのは何故なのかっていうことを大倉正之助さんに尋ねられて。私自身は能舞台を選んだのは、以前にフランスのアーティストの方が来られて

住吉神社の能楽殿でコンサートをされるっていう機会があり観に行った時、本当に魂が震えるぐらいに感動したっていう体験があって、その音っていうのは普段私達が演奏してきたようなライブハウスとかでは体験できないその場所で奏でられる音と、空間と、住吉神社能楽堂自体が楽器となって音が響いているっていう音を体験して本当に感動したんですね。なので私が主催してイベントをするときには能楽殿を使ってやりたいなって前から思ってたんです。

元々イギリスに留学をしていたことがあって、ビートルズのポールマッカートニーが設立した音楽学校に通っていたんですけども、同じ世代のいろんな国の人たちと出会うことができ、文化もバックグラウンドも全然違う人たち同士が集まったときに、対立するっていうことがあったんですね。その時のことを考えていたら八百万の神々自分たちを取り巻く万物に神を見出して感謝するっていうようなことが、前々から日本では言われていることを思い出しました。それでこの「イマジン」っていう曲もジョンレノンが伊勢神宮に行ったときに生まれたっていう風なこととも聞いているんです。私自身、能舞台も全然見たことがなかっ

たんですが、私と友人アーティストの共通して知っていた能楽師が大倉正之助さんだったんです。大倉さんの大鼓の音を聞いたときに、本当に今まで聞いたことのない、そして日本人としてのDNAを呼びさますような演奏をしてくださって、本当に感動したのを覚えています。



中嶋晃子／シンガーソングライター

英国留学後、コロンビアよりレイラーニとしてメジャーデビュー。3枚のCDをリリース。東日本大震災後に中嶋晃子名義で「只今」「あなたと未来の地球のお話」をリリースし、CD1枚につき3本の木がインドネシアに植えられる「Plant three trees in Indonesia for every CD」プロジェクトを立ち上げ2230本のマングローブを植える。映画「アリスの住人」の主題歌として尾崎豊の「群衆の中の猫」を歌う。2023年「あいのうた」を配信。住吉神社能楽殿にて舞台「水鏡」を開催。

大倉さんに能は芸能の起源であるっていうことを、前の打ち合わせのときに聞いたりとかして、舞台には本物しかあげてはいけない。その中には実はもう現代では、ナイロンだったりとか、道具に使われるものも本物ではないもの、麻を使っていない道具だったりとか、90%以上輸入のものが使われているっていうことも初めてお聞きして、ものすごく大切なことを言ってくださってなってるのときに感じとって。このことをもっと私の周りの友達とかにも知らせたいと思いましたし、世界にもっと発信していきたいなって言うふうに思いましたので、今回、伊勢神宮での能楽奉納に何かお手伝いあること、お手伝いできることあればと思ってる今、この場にいさせてもらっています。

話がすごく長くなりましてすみません。今回青木健一さん、同世代の能楽師の方ということで、すごくいろんな質問がありまして、今回の飛天双〇能の舞台で持たれる役っていうのが、翁の中でされる役っていうのはどういった役をされるのかっていうのをちょっとお伺いしたいと思います。

青木健一（能楽師、以下青木） はい、今回私が勤める千歳は、翁役を勤める太夫が舞う前に能舞台を清める「露払いの舞」をさせていただきます。短い舞なんですけれども、「千歳之舞」の最後に太夫は翁の能面を舞台上で付けます。能面を付けるところをお客様にお目にかかる演目は翁だけで特別なことです。能は元々が憑き物の芸能から発展した点もあり、その名残で能面を付けて演じることが多いのですが、翁はお客様の前で神様を能役者に下ろすというか、憑依させるところをお見せするのがとても儀式的で

中でも区切りというか一つのターニングポイントになる奉納になるんじゃないかなと思って、楽しみということではなく、何か身が引き締まる思いで舞台に向けて準備を進めている感じがあります。

豊川容子（アイヌシンガー、以下豊川）

アイヌも儀式でカムイノミっていう祈りの儀式があるんですけども、私の夫はカムイノミをする人なんです。師匠がいてその師匠は2年前に亡くなってしまったんですけど。その師匠が始めたカムイノミで初めてちゃんとユカラ英雄叙事詩をアイヌの言葉で英雄叙事詩を奉納したんです。カムイノミは女性ではできないのでその後の奉納や舞や歌や語りをするんですけど、ユカラを語った時に初め何にも思わずに緊張もしないで始めたんですけど、山に向かって語りを奉納するんですけど、語っている時に全然自分の声が全部吸い込まれていって、自分の声が何を持って語っている場面だったかもわからないくらいすごい感わされるっていうか、あれ今自分何やってるんだらうって何かわからなくなるくらいに語りが感わされてしまっ。そのときに何の心の覚悟もなしにやって、もしかして言葉が通じてないのかなとか、アイヌ語もいろいろ方言があるし怒らしちゃってるんじゃないだろうかとか。やってくる途中で結構パニックになっちゃって、同じところを3回くらい繰り返して語ったりして。それでも何とか終わらせて、そのときはすごい怖い思いをしたんです。

怖いっていうか、自分がちゃんとした覚悟もなしに軽い気持ちでやってはいけなかったんだなってとっても反省したんです。

一度やったカムイノミは毎年やらなきゃいけないって20年近くやってるんですけど。そのあとうちの夫は若いのですが、師匠がお前やってみろって言って夫が祭司カムイノミの祭司をすることになったんです。その後にはやっぱりうちにはとっても悪いことが起きてしまっ。その後師匠と話してもしかしたら、ちょっと若かったから早かったのかもしれないって言ってまた師匠が祭司をやるようになり、うちにアイヌの儀式のお祓いをしてください。私にちょっと悪い病気があって、病気のおかげでお腹の中で子供が育たない状況だったんですけど、お祓いをした次の年に、下の子と上の子が7歳離れてるんですけど、下の子がちゃんとお腹の中で育って無事出産することもできた。そういうこともあったので私はすごいそのカムイノミの力とかお祓いの力とか、その奉納の大切さっていうのをすごくより一層大切に歌ったり捧げるようにしようと思ったんです。

軽い気持ちでもなかったんですけど、中嶋さんからお話を受けて九州の能楽堂に行き、リハのときはそうでもなかったんですけど、本番で私の出番の時に感わされた感じがして、私何歌ってるんだらうって頭を真っ白にされそう。声を出すモニターもあるのにこの声が全部吸い込まれて、これは本当じゃないかと思っ。客席も全部真っ暗で私にだけライトが当たっていたので、目の前に何があるかもお客さんがどこにいるかもわからなかったんですけど、ぐつと気合を入れて歌い続けたらだんだんお客さんの他の輪郭とかが見えてきて、やっと自分として歌えるようになったっていう経験



青木健一／シテ方観世流能楽師

昭和57年11月29日(41歳)。明治時代より能を伝承する青木家の四代目として生まれ、4歳にて初舞台を踏み、数多くの舞台に出演。平成17年東京藝術大学音楽学部邦楽科能楽専攻を卒業後、3世梅若万三郎師に入門。平成23年観世流準職分に認定。平成24年梅若万三郎家を独立、同年能楽協会に入会。

す。憑依させた神が天下泰平の祈りを込めて舞を舞う。翁の演目自体に物語、ストーリーがあるとかではなくて、描かれるのは世の中の平和や五穀豊穡、そういったものを心から祈って舞う。…本当に「祈りの舞」であると私は認識しています。

では能役者が「何に」対して舞っているか：あつ、能役者とい

う言葉は私が長らく薫陶を授かった、故野村四郎幻雪先生が生前よくお使いになっていたのですが、役者は「何」と向き合っ舞っているか？という問いを私は常に持っています。まだ道半ばの私がお話するのも憚られますが、あえて申し上げるならば自分自身の修行や体験、それによって育まれた能に対する「規範」みたいなものに向き合いなから舞っている、というのが率直な感覚です。能は伝統芸能ですから、現代に受け継がれるまでに多くの諸先輩や先人達の心から心に伝えられてきた、いわば「タイムカプセル」のようなものだと思います。誦い方や舞い方が決まっています。それをただ決まりごとのように再現しても芸にはならないんです。タイムカプセルを開いて、封じ込められている何かと向き合っ、ご先祖様、先輩諸氏達と繋がり、それをお客様にご覧いただく、その繰り返しです。

先程中嶋さんが能楽殿で奉納されたときに感じていらっした想いっていうのは、多分、伝統の歴史とか重みのようなものを無意識のうちに感じ取っていただいたのではないのでしょうか。その感覚を表現する側の人たちだけじゃなくて、一般の方にも少し垣間見てもらえるようなことができると、能楽だけじゃなくて他の伝統芸能や日本文化の中に、自分を形作るテーマとかを見つけないことが出来るかもしれません。

今回の伊勢神宮での奉納については、以前旅行で伊勢神宮をお参りしたときに能舞台があるんだな、すごいなと思って見ていた場所、まさかこのような機会をいただけるとは思っていません。多分私の能楽キャリアの場所、身を引き締まる思いです。多分私の能楽キャリアの

の前で演奏しようとか思って作るんじゃないで、音楽のあり方みたいなものが何かを漠然と自分の中にテーマとして出てくるようになりまして。大倉正之助さんの開かれた集まりに行ったときに鼓を演奏させていただく機会があって、そのときに大倉さんがいい音を出そうとか大きい音を出そうと思って打っても自然な音は出ないっていうお話をされていて。実際に自分も打ってみて、自分分っていうものをなくした状態で音を出すっていうことを自分も鼓を通して体験したときに、鼓の調べに触れた自分が、何かを感じてすることに気付いたんです。自分の血というか自分の魂が何かを知っているのかもと思うような、何か懐かしいような気持ち湧いてきて。これはもしかしたら能楽が日本人の生活の中に根付いてきた証拠で、僕の高千穂のご先祖さまが能楽を見ていたのかもしれない。さつき翁の役をやられる時、自分に神様が降りてきてその話をするっていうお話ありましたけども、我というものがなくなったところから始まるっていうその感覚は瞑想にも似てるなと思ったんです。去年初めての能楽を見る機会があったんですけど、世界だかと思って。舞台上に描かれてる老松、あれは鏡と違って、檜舞台から見た観客席にも老松、鏡があると想定している。それを聞いて、合わせ鏡になっていることにもびっくりして。自分を主張するわけではなくて、自分というものを取り払ってから始めてはじめて鳴る音を感じることにしているのが、こういうものが何百年も日本に文化として根付いてきて。それは宗教というよりも生活の中に根付いていて。だからこそ能舞台には農作物とか麻とか、そうやって人たちが作り上げたものが捧げられてそこで



小出青也 / ミュージシャン

音楽家の父の影響で幼少から音楽と芸術に親しむ。幼児生活団卒。90年代後半よりアンダーグラウンド・シーンで活動し日本各地、アメリカ、ヨーロッパ、アジアでのライブやフェスに参加、作品を国内外のレーベルからリリース。個人コンサルタントとしても活動し、企業向けビジネスコンサルティングを経て現在は経営者やセラピスト、フリーランスなどの「個人」を対象にパーソナルセッションを提供しています。

をさせてもらいました。もっと初めから準備して、気合を入れていくべきだったと思っただけです。

小出青也(ミュージシャン、以下小出)

僕は父親がクラシックの音楽家だったこともあって、生活の中にいつもクラシック音楽があって音楽が自分の中で当たり前です。

た。10代ぐらいにパンクとか激しい音楽に出会ったときに自分の中でぐっと衝動が出てきて、それでやり始めたんです。能楽も音楽も字はなんか近いなと思って、今回改めて見てたんですけど、音楽と能楽の違いって何なんだろうって考えていたら、能楽の事を全然知らないんですけど、能楽って自分が無くなったところから始まるものかなと自分は感じていて。やっぱり音楽っていうのは自分の中に何か衝動とか出てくるものとか言いたいこととか、表現したいやり方っていう自分っていうもの、我というものがあって始まるものというか。なんていうんでしょう、その一番始まりの部分が決定的に違うなというふうに感じて。僕が初めてその音楽じゃない音というのに出会ったのが、ネイティブアメリカンの指導者の方が日本に来たときに太鼓を叩きながら自分たちの部族の歌を歌ってるのを聞いたときに、音楽じゃない音というのがすごい心に響いてきたって体験があって、僕が一番最初惹かれたのはその音だったんですね。そのご縁があって大倉正之助さんと25年前に出会うことができたんですけども、それで自分が音楽続けて、音楽ってやっぱりライブハウスでライブやったり、人前で演奏して表現するっていう前提でやるから、なんていうんでしょうね、見る側と見られる側みたいな関係があって、お互いに気にするから僕の場合は完全に純粹であることが難しくって。

今ではいかに自然に自分の中から音が出てくるのか、例えば曲を作るときに一番最初にふっと浮かんでくる音とか、その純粹さを大事にするようになって。こんな曲作ろうとか、誰かの人生が奉納される、すごい大切なものが日本に残ってるなと思っただのと同時に、大倉さんがやられてる令和文化蔵の活動のお話を聞いたときに、さつきもおっしゃってましたけども麻がナイロンになっていたり、その着る服から、足袋から、鼓の材料から、そういういった古来からその神下ろしをしたりするような場で、使われてきた神聖なものが、自分たちの手元になくなってしまってる現状を、今の令和の時代で取り戻したいっていう活動をされてることを知って、それは何て言うんだろう、この日本の伝統文化にとつて本当に意義のある大切なことで、次の時代に繋げていくっていう、その活動が未来に繋がっていくといいなって思います。そんな感じですよ。

青木 いま青也さんのお話で、音楽の出発点が自分の内なるものの表現というのに対して、能は自分がなくなった時点を出発とする、っていう意味のお話があったんですけども、能の動きや所作は型と呼ばれるもので全て決まっています、修行の過程で、まず師匠から徹底的に型を教わっていくんです。それが正しく再現出来るようになるまで舞台の出演が許されて、出演した舞台上で型をやったときにお客様に表現が伝わるといふ流れになります。ですから能や型の修行を始める時に感情は必要ないんです。泣く演技をする時に、自分が悲しい感情を作って表現するんじゃないで、まず言われた通りに型ができる、っていうことが大事。そう考えると能を舞う役者っていうのは、「器」のような存在にも思えますね。要はお客様側からも役者にアプローチしてもらって、表現が完成する。「器」に何か思いを盛り込んだり、重ね合わせたり



豊川容子／アイヌシンガー

アイヌの歌や躍りを取り入れたバンド nin cup のボーカル。
アコースティックユニット z i z i のボーカルとして関西を中心に活動し2007年アルバム「door」をリリース。北海道帯広に戻った後、自身のルーツであるアイヌのウポポ（歌）を取り入れ歌い始める。「60のゆりかご」という短編アニメで夫のルーツである平取地方のイオンノッカ（子守歌）歌を担当。youtube で視聴できる。2016年度S T V ラジオのアイヌ語ラジオ講座講師。札幌在住。

応すると結局セリフや所作は間違えていない、ということになる。これがこの現象に対する私の考察なんです。型だけを、つまり手順や外側だけをコピー&ペーストしてると、この状態にはならないと思います。

話は変わりますが、アイヌシンガーの豊川さんのお話にもあり

するのはお客様ご自身の側の行為というか行動で、それが不可欠なのかなと思います。日本に残っている多くの伝統芸能の中で、能はお客様のアプローチや行為を特に必要としている、いや、それがないと成立しない芸能と違って、いいます。

能を観た時、つまらないっていう人は多分その器の外側しか見えていなくて、もっと能の物語や世界観、そして「器」になっている役者の人生観とかを想像しながら観ると見え方が変わってくるかもしれないですね。能と歌舞伎を比べると歌舞伎は役者を見に行っているように感じます。対して能の場合は役者を見るっていうより能を観る、つまり能で描かれている登場人物の思いを追体験して、自分の人生経験とか自分を形作るテーマとか存在意義とか、そういう自分を再認識する。能を観ることを嗜んでいる方は「自分を見つめ直す」、もっと踏み込んだ言い方をすると、お客様が「自分自身と向きあっている」みたいなことを無意識の中でなさっているんじゃないでしょうか、多分ですがね。そう考えると、先ほど能舞台の鏡板について中嶋さんがお話されましたけど、能って「自分を映す鏡」と言えますよね。

小出 うん。なんかそれ今聞いてちょっと思ったんですけど、その型という話なんですけど、僕は自分を音楽で表現したいと思っていたので、クラシック音楽家の父親はこんなに音楽も楽器もできるのになんで自分の曲を作らないんだろう、何で自分の曲やらないんだらうってずっと疑問だったんです。ようやく最近になってわかった事なんですけど、父親がやっていたことは、数百年前に作られた例えば完全に近いクラシック音楽、メロディーつ

という型の中に自分が入ってそこで音そのものになっていくような行為で、それを自分が見てたというか、そういうものが生活にあったんだっていうことを、結構最近気づいて。型をやってそれが器としてあって、そこにいろいろなことが起こるんだって、今お話聞いて思いました。

青木 能がすごい、と言われるんですけども、やっていることは器的なことなので、実はお客様ご自身に能の価値を見つけて頂かないといけないんです。演じている能役者が、あつ今の型良かった上手くいって、なんて自分で陶醉しちゃうと、その瞬間に自分が出ちゃって、お客様もすぐわかっちゃうんですよ。公演の後に動画とかビデオとか見て、確認や反省はするんですけど、舞台上演じている瞬間に、これいいよなっていうふうには思ってる感覚は偽物だと思っています。

変な話ですが、私が能を舞っているときに、セリフを間違えたかな？とか、この順番で良かったっけ？と思って、舞台が終わってから他の能楽師に確認すると大丈夫だった、なんていう経験が少なからずあります。他人からは、ただの稽古不足だと言われるかもしれませんが（笑）、ある種の自分が無くなっている状態なのかもしれません。

何回も稽古して舞台上に臨むんですけども、本番で物語の中に自分が入り込むというか埋まった状態になると、相手役の人が発した言葉や行動に対して素直に反応しているみたいなんです。だからこちらが返す言葉や行動は、その時感じた心で受け答えをするんですけど、「型」しか自分の中に持ち合わせが無いから素直に反

ましたが、私は伝統的なことに携わる方って、ご縁とか見えない力みたいなものに突き動かされる瞬間が多いように感じます。私の曾祖父が明治36年に能楽師になってから、祖父も父も私も能を家業とさせていたんでんですけど、歴史がある家にいると、私の錯覚かもしれませんが、何か見えない力で動かされることがあります。例えば、私には力不足で演じるには早いと思っていた演目や、まだまだそんな立場ではないと思っていた役目を、周囲の能楽師や後援者から、まずはやってみようよと仰って頂いたことが多くあります。自然にそっちの方に行かざるを得ないというか、後ろから背中を押されるというか。または外堀を埋められて、ここを通らざるを得ない状況というか、そういうものに引張られ、また導かれながら歩んできたように感じます。

こんな話をする、不思議がられるし、理解してくれる人も少ないかもしれませんが。現代って、すぐ分かるもの、答えが決まっているものが良くて、分かりにくくて答えが無いもの、特に伝統的なものを敬遠しがちがという気がします、偏見かもしれませんがね。じゃあ全てのことを伝統的なものに戻せばいいかっていうと、そうでもなくて。伝統的な視点も合わせ持ちながら、今を大事に生きることが出来ると思いますよ。

能の伝統的な修行って、整備された登山道に行くというより獣道を進んで山頂を目指すって感覚に近い気がします。簡単に獲得出来るテクニク的なことよりも、試行錯誤や苦しみながら自己開発して精進していく。登りきった山頂からの景色、眺めは同じかもしれないけど、自分の中に積み上げられた塔は雲泥の差にな

ると思います。

現代の人たちに能を受け継ぐ役者の心構えを押し付けるんじゃない、能役者って不合理な生き方だけど、こんな伝統的な生き方をする人も現代にいるんだよ、っていうのをわかっただけでいいのかなって思います。まさに「君たちはどう生きるか。僕はこう生きている。」みたいな感じですよ。皆さんの感覚とすると今の話はいかがでしょうか？

豊川 私の母親も、私が子供のときからずっと歌ではなくってアイヌの舞踊をしていたんですけど、アイヌっていうのは差別される人たちだったので、アイヌっていうことを言わないで生きる人がたくさんいるんです。私も自分がアイヌだっていうことを歌でみんなに伝え始めたのが30歳になってから。それまでは普通のポップスを歌ってたんです。アイヌの歌を歌うようになったことが、自らアイヌだっていうことを明かしていくきっかけとか。自分がアイヌだって言えないので、アイヌの歌を歌っている姿を友達に見せていくっていうのが自分のカミングアウトだったんです。30歳までは自分がアイヌだっていうことから避けていたもので、アイヌの歌を歌うこともしてなかったんですけど。子供の時からアイヌの歌や舞踊をして今でも踊っている友達もいるんですけど、1回離れる人が多いですよ。それは思春期のときからちょっと大人になるまでなんです。それでもやっぱりアイヌのことをするのに戻ってくる人が多くって。そういうことをアイヌの言葉でカムイレンカイネって、日本語に訳すと神のおぼしめしって言うんですけどね。カムイレンカイネで神様がそのように仕向

れて：騙されとは言いませんが(笑)、子供のときから自分が舞台に立つことを期待してくれて、私はその期待に応えていくっていうことが、能を続ける原動力になっていました。

多くの方に見守られて続けてきたので、ことあるごとに先輩諸氏に能の教えを乞うのですが、今思うのは亡くなってしまった師匠や先輩たちが、今の自分の舞台見たらどう思うかな、と最近よく思います。神に見つめられてるっていうお話がありましたけど、師匠は今の私の芸をどう思いますか？と聞きたいけど聞けないわけです。だから自分の心の中で師匠と対話するしかないんです。今の謡では駄目ですか？以前教えて頂いたことをちょっとアレンジしてやってみてみるんですけども、駄目ですかね？みたいなやり取りです。自分の心の中にある師匠って大きくいえば自分の一部ですから、自分と対話して稽古をし、舞台上で表現をするということは、大きく捉えると、やっぱり能を舞うってことは自分と向き合っていると考えるといます。

司会 これまで表現者の皆さんのお話を伺って興味深かったのは、自分と向き合うというところは共通にお持ちなのかなと思います。ではそういった皆様は考えているご奉納についてお聞かせいただけますでしょうか？

中嶋 奉納って何なんだろうっていうところから始まって、「水鏡」の舞台を企画した時も自分のオリジナル曲も歌ったんですけども、それ以外にカバー曲「イマジン」だったりとか、皆さんが知ってるマイケル・ジャクソンの「ヒール・ザ・ワールド」そういう曲も歌ったりとか。あと即興演奏も今回はたくさんやっ

けているっていう。一生を隠してアイヌとして生きないこともできるけど、30過ぎて自分を隠して生きていいのかなみたいな。

でもアイヌだって言うことは勇気がいるから、まず歌を歌ってその歌を歌っている姿を見せるみたいな。私の先輩でもそうやってアイヌにまた戻ってきたっていう人が結構いるのです。それは避けようと思えば避けられたかもしれないけど、私も戻ったアイヌの仲間たちと一緒にやることに戻ってきているので、そういうことがあります。何か言葉がおかしい。

青木 自分のルーツに戻ってくる、実に興味深いです。それって正に己と向き合ってますよね。

自分から戻ろうと思うのか、神様がそう仕向けてるのか分かりませんが、どちらにしても自分とは何者なのか、他者とは社会とは何か、そういった自分と向き合うことが出来る人って幸せだなと思います。

それに関連して思ったのは、いまの子供さんたちに伝えたいのは、無理して自己実現や自分探しみたいなことはしなくていいんだよ、ってことです。今の教育は自分のやりたいことを見つけよう、なりたい自分になろう、とか言い過ぎてませんか？理想像を持っていての子はいいんですが、そうではない子も多いみたいです。自分から何かを発見して発信していく在り方もあれば、周りから求められてそれに応えていくっていうのも一つの在り方じゃないかなと思います。だから慌てずやりたいことを見つけたい、くらいでいいんじゃないですかね。

私も能が家業の家に生まれて、うまい具合に父親とかに唆かされたんです。その中で一番奉納っていうものに近づけるものも、もしかしたら即興演奏のようになって思ってたんです。先ほども青也さんも瞑想に近いものじゃないかっておっしゃってたんですけど、即興演奏をするときに、自分自身を信じ、毎瞬毎瞬信じてないといけないことだなんて思っています。次に何が来るかわからない。私はシンガーソングライターなので歌詞を元々作るんですけどコードがあって歌詞があって。そして歌うんですけどピアノ弾き語りとか作品を作って、それを奏でるっていうこともなんですけど、奉納するってそのとき一瞬一瞬の自分を信じて、青木さんが器っておっしゃってたけど、ステージの上に立つときに、自分っていう時と自分自身じゃない何かというか、今の演奏って自分でやった感じがしないって思う時の両方があるって。何かそうしていいうちに奉納演奏というものに近づけるのかなって思います。先日は大倉正之助さんと一緒にさせていただいて、まさかの「イマジン」っていう曲にも大鼓が入っていたんですが、そのときにこんなふうに入られるんだっていうのが本当に感動でした。今までの西洋のものピアノとかもそうなんですけど、小さいときからの西洋の音楽をずっと聞いて育ったということもありましたので、そのリズムの中に大鼓の音と声が入るっていうことが本当に新鮮で鳥肌が立ちました。ありがとうございます。

豊川 カムイノミ、アイヌの儀式の話になっちゃうんですけど。うちの夫がアイヌってのは人間のことなんですけど、アイヌが楽しくなればカムイも楽しくなるってよく言うんですけど、やっぱり喜ばせることなのかな。私はちょっと臆病者なので、怒らせないっ

ていうのがすごく気になっちゃいます。もし私が至らなくて怒らせたらどうしようって。心配症なので。まだ喜ばせるっていうのが一番の目的なんですけど、私は逆に怒らせたらどうしようっていう不安も出てきちゃったりします。

小出 奉納って捧げ納めるって、神社の奉納のというのを頭に浮かべながら考えてたんですけど。神様と自分たちが繋がる、生身の人間と目に見えない存在との間には違いがあつて、いつでも話せるわけではない。ちょっと次元が違うけど一緒にいるような存在だと思つて。奉納することによって、自分たちのこの現象の生身の肉体の世界に、清い心で作られた清いものを並べる、その神様の前に並べるっていうことで、捧げるといふことで、その奉納するものの、清らかさというものが、生身の現象界とその目に見えないものと繋ぐとかそこが繋がる。繋がるためのということか。うまく言えないですけど、目に見えない世界と自分たちの世界の間に繋ぐもののように奉納というものを感じてます。奉納することによって、繋がって何を願うのかとか、何を思うのかとか、なぜそれをやるのかっていうところは、奉納といつてもいろんなところでいろんな形で行われているものだから、その所々でそれをする。奉納する。はるか昔の存在であつたり、時間を超えた存在だつたり、そういったものと繋がるための道というか。そう捉えています。うん。だからただ、例えば、よく音楽奉納とかもあるじゃないですか。例えば詩を読んだりとか、神様の前でパフォーマンスさせてもらうとか。そういうのもあつたり見たことはあるし、それはそれですごくいいとも思います。

だき、すごくありがたいんですが、別の機会や公演では裏方に回することも結構あります。裏方の仕事をおろそかにするとその翁がより良い形でできなくなっちゃう。だから「自分の役割を全うする」ことで自分が翁「全体の一部」であることを強く認識させられます。社会生活に置き換えると、誰か1人が変に自分の欲だとか、願望に走り過ぎちゃうと世の中が崩れていく感覚に近いです。翁を奉納するっていうことは、自分が社会という共同体の中の一部であるっていうことを受け入れて、そして自分の任せられたことを全うする、っていうことに繋がると思っています。こういう思いは翁奉納の時だけに限ったことではなく普段の舞台でも共通しています。むしろ普段の舞台の方が断然数が多いので、その一つの舞台で自分の与えられたことを全うしていきたい、と思いがら取り組んでいます。だから奉納は日々の積み重ねの上に、またその遙か延長線上にあると感じています。

中嶋 晃子さんにお伺いしたいのですが、奉納で即興の演奏された時に、常にいろんなものに対応していくことで、自分じゃなくなる瞬間みたいのもあるみたいなことでしたが、結構能に通じるなあと思いました。その現象、状態を皆さんもご存知の能を作った世阿弥が書き残した風姿花伝という書物で紐解くと「離見の見」という言葉が当てはまるかもしれません。これは役者が能を演じてるときに、一番良い状態、望ましい状態を指す言葉です。具体的には、舞台上立つ役者が自分の姿を斜め後ろの高いところから見つめながら演じている状態らしいです。要するに、自分が表現することから一歩引いた自分を併せ持つ。相反するものを持

そういつたものの究極の形が能楽なのかなって。

今日も話を聞いて思ったんですけど、やっぱり青木さんのお話を聞いて思ったんですけど、場の空気が瞑想状態にすごい似てるなって。瞑想も瞑想に入っていく時に、瞑想に入ったと思つた瞬間に意識が戻っちゃう。何か起きたときにそれを言語化したりとか、判断したりとかすると、それってやっぱりぱっと消えてなくなってしまうぐらい、すごく繊細で清らかなものだから。奉納って、そういう静かで純粹な場があつて、そこに人々のその思いと、清らかな奉納という行為と、そしてその繋がること。うん、なんかうまく言えないですけどそんなイメージです。

青木 今回の奉納で、現代においての奉納って何かなって考えるのが一番大切なことと思つてます。昔は神様と繋がるっていうことだったと思うんですが、今の時代で神様って言ってもキョトンとしちゃう人が多いです(笑)、逆に変な目で見られてしまったりするとすごく残念です。だから神様という存在は社会的な規範やルール、目標に置き換えるのいいと思つているんです。社会全体が他者を思いやるとか、行儀良さ、誠実さ、要するに人間として生きていく上での理想像とイコールになるんじゃないかなと思つてます。

翁を上演する際に常に感じるのは、与えられた役目を果たす、全うすることの大切さです。翁は一人一人役割や儀式が決まっています、自分のやるべきことをすべて全うしないと、翁が完成しないんです。与えられた役割を全うして、一つにまとまった翁を神様に捧げる。今回私は大変光栄なことに千歳を勤めさせていた

ち合わせながら舞台に取り組む、その状態が一番いいんだっていうことと私は解釈しています。

だから離見の見のような状態を体験されるのかなと思つたのですが、そういったものに至る時に共通しているスイッチというか、ご自身の中で何かが変わる瞬間の感覚あれば、お伺いしたいのですが。

中嶋 ありがとうございます。私とその状態になるときはもう無我夢中というか、何も感情とか、思考が入ってない、あつという間に時間が過ぎてしまうっていう状態。舞台の上に立っている時にはそんなことさえも考えないんですけど、ゾーンに入るっていうんでしょか、わかんないんですけどそんな状態です。あともう一つ「水鏡」の打ち合わせで大倉正之助さんからお話を伺ったときに、能は芸能の起源であると言われて、自然との仲次役であるっておっしゃっていたので、青也さんがおっしゃっていた何か繋がるって言われていたのが、その仲次役っていうことなのかなって思いました。日々脈々と受け継がれてきた農業や林業、その功績を称えるための取次役として、自分がその器になって繋がっていくのになつて、今の青木さんのお話をお伺いして思いました。同世代の能楽師のお友達っていうのがいないので、すごく嬉しく思います。お話ありがとうございます。

2月5、6、7、8日伊勢の地で、皆さんとまたお会いできるのを楽しみにしております。本日はありがとうございます。